

19世紀後半アメリカにおける「月経」をめぐる論争の展開

—M. P. ジャコビーの『月経中の女性の安静にかんする問題』を中心に—

横山美和*

Study on the Argument of “Menstruation” in Late Nineteenth-Century America: Focusing on M. P. Jacobi’s *The Question of Rest for Women during Menstruation*

YOKOYAMA Miwa

Abstract

This article examines the argument concerning “menstruation” in late nineteenth-century America. With regard to an expansion of women’s higher education, *Sex in Education* (1873) by Dr. Edward Clarke generated a controversy by stating that young women needed rest during menstruation; therefore the rigor of higher education would fail their health. Dr. Mary Putnam Jacobi refuted this argument in *The Question of Rest for Women during Menstruation* (1877). She attempted to combat the male researchers’ notion that women’s activities are irresistibly limited because of menstruation. Jacobi experimentally verified the theory that women gradually accumulate a supplemental nutrition and menstruation eliminates it. Women’s variation of nutrition showed a wavelike pattern. She concluded that women, therefore, do not need rest during menstruation if their nutrition is normal. She conducted a questionnaire survey and found that 46 percent of the respondents had some health troubles during menstruation, which she attributed to other factors, not menstruation. Nevertheless, some researchers noted that this proportion demonstrate the need for rest and regarded this wavelike variation of nutrition as dangerous. Although gender bias in scientific discourses continues, Jacobi deepened the knowledge of menstruation from a viewpoint different from that of mainstream males.

Keywords : Mary Putnam Jacobi. Late Nineteenth-Century America. Menstruation. Sex. Scientific Discourses.

はじめに

19世紀後半のアメリカにおいて、男性のみに許されていた高等教育や医学教育に女性が進出するようになると、女子高等教育反対派からバックラッシュが巻き起こった。なかでも、とりわけアメリカ社会に影響を与えたのが、元ハーヴァード・メディカル・スクール薬物学教授E. H. クラーク (Edward Hammond Clarke 1820-1877) の著書、『教育における性別、あるいは、女子のための公平な機会』(*Sex in Education, or, A Fair Chance for the Girls*, 初版1873年)であった。クラークは、この書において生理学の観点から、知的活動に多くのエネルギーが消費される高等教育を受ける女性は、月経時に学業を控え安静にしなければ月経に不調をきた

キーワード：メアリ・パトナム・ジャコビー、19世紀後半アメリカ、月経、性別、科学言説

*平成18年度生 ジェンダー学際研究専攻

し、全身の健康に悪影響を与え、さらに不妊となる恐れがあると訴えた。彼の著作は17回も版を重ねるほどのベストセラーとなり、大学教育が女性の健康と種の存続にとって有害であるという言説を普及させた¹。高等教育を求める女性たちからは高等教育有害説に反論の声があがったが²、多くの場合クラークの生理学的前提そのものを批判するまでには至らなかった。しかしながら、そのような中で、女性医師メアリー・パトナム・ジャコービー (Mary Putnam Jacobi 1842-1906) が、『月経中の女性の安静にかんする問題』 (*The Question of Rest for Women during Menstruation*, 1877) において、医学や生理学の知識を駆使して反駁し、かつ統計や実験観察を用いて新しい月経の解釈を提示したことは、注目に値する。ニューヨーク女性と子どものための診療所附属女子医科大学 (The Women's Medical College of the New York Infirmary for Women and Children) の薬物学・治療学教授でもあったジャコービーは、当時パリの医学校 (École de Médecine) を卒業した数少ない女性正規医師であった³。彼女の著作の根幹となった論文は、「女性は月経時に精神的および肉体的な安静が必要か、それはどの程度か」⁴ というテーマで募集されたハーヴァード・メディカル・スクールの懸賞論文で、1876年にボイルストン医学賞 (The Boylston Medical Prize) を獲得しており、彼女の名を一躍有名にした (Bittel 2009, 126-7; Walsh 1977, 130)。しかしながら、著名な賞は獲得したものの、そこで展開された主張は、医学界や社会に全面的に受け入れられたわけではなかった⁵。彼女の主張に対する論争の展開については詳細に研究されていない。女性医師の立場からのジャコービーの見解は、月経の生理学的な知識にいかなる影響を持ったのか。本稿では、ジャコービーが提示した「月経」や「女性」についての新たな科学的な解釈が、どのように受け入れられたかという展開過程を辿ることにより、19世紀後半のアメリカ社会の「月経」にかんする生理学的な知識の受容と立場性について考察する。

1. 「女性」を構築する科学言説

(1) 「月経」にかんする「科学的」な認識の変遷

西洋において、古代ギリシア時代から19世紀初期に至るまで、月経は、胎児の栄養分となるための体液が、妊娠しなかった場合に体外へ排出される現象であるとされてきた。古代ギリシアでは、男性の役割は、精液により胎児に靈魂を与える力を持つもので、女性の役割は血液により肉体を作る材料や栄養を提供するだけとみなされており、男性の役割に比べて低い価値が与えられていた。しかしながら、17世紀にはオランダのグラーフ (Regnier de Graaf 1641-1673) が卵胞を、レーウエンフック (A. van Leeuwenhoek 1632-1723) が精子を発見し、男女の生殖における役割も見直しが図られた。このとき交尾排卵型の動物の観察から、ヒトも性交により排卵が起こると類推されるようになった。1828年にはドイツのK. E. v. ベーア (K. E. von Baer 1792-1876) が哺乳類の卵子をイヌから初めて確認したことが、同じ哺乳類である人間の卵子の存在の確信も強めることとなった。実際にヒトの卵子が確認されるのは20世紀になってからである。19世紀に入ると月経の見方は大きく変化し、卵子が子宮を刺激することによって月経が起こると主張されるようになった。19世紀半ばになると、「自然排卵説 (the theory of spontaneous ovulation)」が登場したことにより、月経の見方を大きく変容させた。1843年、T. L. W. ビショッフ (Theodor Ludwig Wilhelm Bischoff 1807-1882) が、発情期だが交尾をしていないイヌの排卵を報告し、排卵の認識を覆した。それを受けて博物学者プーシェ (Félix-Archimède Pouchet 1800-1872) らは、哺乳類においては周期的な発情期に交尾なしで排卵が起こるのであり、ヒトの女性において発情期は、月経期にあたりと類推した。1860年代には、ドイツの生理学者E. F. W. プリュージェル (E. F. W. Pflüger 1829-1910) は、急激に発達する卵胞の刺激によって出血を引き起こす、つまり月経が起きると考えた⁶。

要するに、19世紀半ばには、月経は、それ自体に機能や目的があるわけではなく、発情期におこる排卵が原因である痛々しい付帯的な出血現象であるとみなされるようになったのである。このことは、1867年にある医学誌に掲載された論文のタイトルが「月経、または月経出血：排卵の付帯兆候」となっていることにも表れている (Maughs 1867, 812)。歴史家のJ. ミシュレ (Jules Michelet 1798-1874) が、月経があるがゆえに女性を「病人」や「怪我人」と呼んだように (1860, 42)、女性は月経時、卵巣の興奮によって多くのエネルギーを消費してしまい、かつ出血することによって健康な状態が損なわれる存在とみなされるようになったのである。

『教育における性別』で物議を醸したクラークは、卵巣を「エンジン」(1874, 37) と呼ぶなど、月経時は生

生殖器が活発に活動する時期であるという19世紀的な生理学の知見を独自に発展させた。クラークは、月経は付帯兆候に留まらず、「月経」にこそ特別な機能があると考えたのである。その機能とは、排卵のほかに血液による生殖器の新陳代謝、および思春期においては生殖器の成長であるとし、月経時はそれらが十全に働くように、エネルギーを十分確保するべきとの見解を述べている (Clarke 1874, 41, 46-7, 94)。1840年代より、クラークの勤務校であったハーヴァード大学にも女性受入れの再三の要求があったが (Bittel 2009, 127 ; Walsh 1977, xiv)、クラークは、彼の寄って立つ生理学を基盤に共学に対する反対をはっきりと打ち出した (1874, 17-8, 127, 149-50)。女性が共学で男性と同じ教育を受けることができない理由は、大学側の不当な決定によるものではなく、月経時には安静にするべき女性の側にあるとして、共学反対の正当化を行なったのである。

(2) 「いやおうなく制約される性別」としての「女性」

ジャコービーは、前項でみたような、19世紀における医学や生理学による月経の捉え方がもたらす影響を問題視していた。女性には月経があることによって他の活動にエネルギーを振り向けることができないという見解は、女性の高等教育や医学教育への進出を抑制してしまうからである。女子医科大学で教鞭をとるほか、1872年に女性のための医学教育推進協会 (The Association for the Advancement of the Medical Education for Women) を立ち上げるなど、女性の医学教育の熱心な推進者であったジャコービーにとって、女性を抑圧するような科学言説の検討は大きな課題であった。

確かに、1837年のオーバーリン大学の共学化を皮切りに女性の大学教育への道は徐々に開け、E. ブラックウェル (Elizabeth Blackwell 1821-1910) の女性初の医学での学位取得 (1849年) によって、女性は医療専門職にも進出が可能になりつつあった。しかし、そうした社会的制度の変化はあっても、科学言説による女性の抑圧は続いていた。その状況に対処するため、ジャコービーは、『月経中の女性の安静にかんする問題』において、月経にかんする理論そのものを検討し直すという作業を行なっている。既存の月経認識を変更しなければ、女性の高等教育進出を抑制するための医師たちの介入を阻止することが難しくなると判断したためと考えられる。

ジャコービーは、示された知をただ内面化するのではなく、月経や女性の性に対する意味付与のパターンに気付くことによって、科学言説による「女性」の構築のされ方が問題であることを認識し、変革の糸口を掴んだ。例えば、ジャコービーは、科学や医学に従事する男性たちが、男性と女性という性に異なる意味を付与してきたとして、次のように訴えた。「男性の性的な有機的構成〔生殖器〕のもつ特別な性質と働きが全身の有機的構成〔身体〕に対して与える影響について、男性が多くの研究で調査してきたというのは本のだが、しかし、この影響が〔男性の〕本質において『制約を課す (“limiting”)』とみなされることは稀である」(Jacobi 1877, 2. □内は筆者補足)。植物においても動物においても、有性の有機体は無性の有機体より高いランクに位置づけられる。すなわち、性徴の発達は未分化の生物の状態からの進歩を示すものであり、このことは、男性にかんしては当然のように認められており、生殖器官がもつ機能が活動の足かせとなると考えられることはほとんどないという (Jacobi 1877, 2-3)。しかし、ジャコービーは、女性の性徴に関わる場合は、全く事情は異なると述べる。つまり、もう一方の性である女性の場合となると、性徴の発達が進歩を示すという基本的な概念は変わってしまい、月経など、性徴の発達により器官の働きが変わるだけで、女性という性そのものが、病理的で、健康な活動が常に損なわれる存在とみなされてしまうようになるというのである (Jacobi 1877, 3)。言い換えれば、子ども期の男女の機能的差異がほとんどない状態から、男性的性徴が発達することは「進歩」であるのに対し、女性的性徴が発達することは「病気」になるようなものだというのが、男性研究者によって構築されてきた性別認識だといえる。

ジャコービーは、性別の意味が男女で異なるのは、これまで男性研究者によってなされてきた「月経」の「科学的」な説明が原因だと捉える。女性の性徴の一つである月経は、エネルギーを奪い、いやおうなく活動を制限するものとみなされていると、ジャコービーは解釈したのであった。さらに、月経は甚大なエネルギーが必要な建設的な機能であるというクラーク流の訴えは、自己規制までしてエネルギーを確保すべきとしたところが特徴である。しかしその主張は、月経に痛みや困難を感じていない女性たちの活動までも「制約する」根拠として機能したのである。

以上みてきたように、女性は月経のために制約を受けるという科学言説は、高等教育において月経時の安静

を求める根拠とされた。男性と同じ教育を求めるジャコービーは、この問題に挑戦し、男性研究者や医師が構築してきた月経およびその機能を負う「女性という性別」に対する認識を問うたのであった。

2. ジャコービーによる「生殖と性別」認識の変容

(1) 女性の穏やかな「生殖」

では、まず本項では、ジャコービーが既存の科学言説によって構築されてきた性別認識をいかに解体しようとしたかを、自然排卵説や生殖、月経の解釈から見ることにする。

ジャコービーにとって、プーシェらによって「発情期である月経時に排卵が起こる」とされた自然排卵説は修正されるべきものであった。なるほど、自然排卵説の登場により、ヒトの女性においては排卵と性交は切り離されて考えられるようになった。しかし、プーシェらの推測では、未だ排卵は発情という性的興奮と関連があるとされていた。ジャコービーにとっては、「自然に」排卵が起こるという説は、まさに、女性では排卵という「生殖の本質的部分は性行為なしでも目的を遂げられる」（1877, 83）ということのみを告げる説であった。つまり、必ずしも排卵と性的興奮＝発情を結び付ける必然性はなかった。ジャコービーは無性生殖に言及し、雄や雌という性別があること、性的に興奮することが、「生殖」という個体を増やすことに必要ではない場合もあることに注意を向けた。そして、ヒトの女性における排卵も性的興奮とは関係なく起こると推測した。排卵の原因としてジャコービーが注目したのが栄養であり、栄養を運ぶ血液が全身に充満し、血圧が上昇すると卵子が押し出されるようにして排卵が起こると仮定した（1877, 80-3）。19世紀の生理学に多大な影響をもたらしたフランスの実験生理学者C. ベルナル（Claude Bernard 1813-1878）の説を参考にしていながら、ジャコービーは、「本質的には生殖は〔性的な活動ではなく次世代のための〕栄養〔を蓄える作用〕の一過程である」（Jacobi 1877, 82）として、「生殖」を個体の栄養の余剰分を蓄えて別個体を生み出す過程として捉えた⁷。こうして「生殖」の本質は個体を増やすことにあり、有性生殖は生殖の形態のバリエーションの一つであるということを確認し、男性・女性という性別と、その性的な関係や興奮とのかくごだわりがちな考え方を戒めたといえる。

さらに、ジャコービーは、発情と月経を同一視するのは「全くの推論」（1877, 71-5）に過ぎず、月経は「植物的＝栄養的生命（vegetative nutritive life）」に属す現象であり、「動物的生命（the animal life）」（1877, 101, 165）に属すものではないと主張する。19世紀において、哲学者コント（August Comte 1798-1857）などによって、動物の生命は、「動物的生命（la vie animale）」と「植物的生命（la vie végétative）」の2つに分けて考察されたことが念頭に置かれているようである。「動物的生命」とは、動物のみがもつ、刺激と反応、興奮に基づく生理現象であり、「植物的生命」とは、動植物に共通する、呼吸・循環などの栄養にかかわる機能をもつ生理現象である（村松 2005）。月経と発情を同一視する言説は、月経が動物だけに特有な興奮に基づく生理現象のひとつであるところから生じる。しかし、ヒトにおいて月経と排卵、性的衝動に直接的な因果関係はないとして、ジャコービーは否定する（1877, 99）。さらに、女性の排卵という生殖活動と植物のそれとの類似性を次のように指摘する。「グラーフ卵胞の連続的成長は、大枝につく芽の連続的成長とよく似ている」（Jacobi 1877, 98）。植物との類似性に言及することによって、ジャコービーは、排卵と月経を、性的興奮とは切り離された現象であるとし、植物のような穏やかなイメージに塗り替えることを試みたと考えられる。

加えて、1873年頃より、月経は排卵の刺激によって引き起こされるという説が他の論者からも疑義が呈されていた。オーストリア人病理学者H. クンドラット（Hans Kundrat 1845-1893）とアメリカ人婦人科医G. エンゲルマン（George J. Engelmann 1847-1903）らは、「月経とは、月経と月経の間の期間に徐々に厚みを増した子宮内膜が脂肪変性を起こして落屑する現象である」という説を唱えており、ジャコービーはこれを支持した（1877, 92-101）。これに加え、上述の栄養の観点から、古代ギリシアからの、女性は胎児のための栄養である血液を余分にもつとされた説も参考にした。その上で、ジャコービーは、女性の身体には「栄養の多寡変動（wave of nutrition）」があり、月経期はその絶頂期で、月経後は低下するのではないかという仮説を提示し、検討することとなる（1877, 111, 115）。

(2) 「付加的栄養説」による月経の意味づけ

次に、ジャコービーが実験によって月経をどう意味づけ直したのかを見ることにしよう。ジャコービーは、19世紀に開発された代謝研究の手法を用いて、「栄養の多寡変動」という仮説を検証するために、6～8人の女性被験者の協力を得て1～3カ月にわたる実験観察を試みた。尿中に排泄される尿素の量や、心拍数や血圧、体温等、数値で計量できるものを求めたのである (Jacobi 1877, 115)。尿素の排出については、血液循環・代謝などの栄養の動きを図る度合と考えられた (Jacobi 1877, 162-3, 179)。それらをグラフ化したところ、多くがリズムカルに、かつ月経に関連してサイクルをもって変化することが見出された。ジャコービーによれば、月経前の数日に多くのケースで血圧がわずかに上昇し、尿素の排出量が増えることは、血流量の増加と循環の促進を示す。月経中は血圧も尿素量も減り始めるが、これは直前に増えた分に応じて減る程度に過ぎず、月経時だからといってそれ以外の時期より大幅に減るというわけではない。月経前に血圧や尿素排出量が増える現象が妊娠後期の現象と似ているため、月経直前は「小規模な妊娠 (*a pregnancy miniature*)」のようなものであるとした (Jacobi 1877, 160-5, 178-80)。すなわち、体内の栄養が個体維持分を超えて付加的で余剰になっていることを示すと考えたのだ。女性の体内では、周期的に血液が余剰となりわずかな血圧上昇をもたらす。ジャコービーはこれを「付加的栄養説 (Theory of supplemental nutrition)」とし、妊娠しなかった場合は子宮内膜が脂肪変性を起こしてもろくなるため、血液が圧力によって子宮内膜から流出することが月経であり、本来痛みがないものであると解釈する (1877, 165, 195, 225)。ジャコービーはこれらのことから、「栄養が〔十分で、諸器官の機能も〕全く正常な女性にとっては、月経の性質には、〔月経時の〕安静の必要性や、安静が望ましいということさえもない」 (1877, 227) とした。むしろ、月経時に長く安静にするより、付加的な栄養を蓄えるために、普段からより頻繁に短い休憩をした方が良いと述べる (Jacobi 1877, 232)。女性が個体維持に必要である以上の栄養を蓄えておくことができれば、月経時であっても全ての女性が安静にする必要はない。

このような実証的観察を経て、ジャコービーは「女性」にとって月経があること自体が不利にはならないという解釈を提示したのである。

(3) 月経困難と生活環境との関係

続いて、ジャコービーの行なったアンケート調査について述べる。このアンケートは、アメリカ在住の女性に対して、学歴や子ども時代の健康、家族の健康、体育経験、職業、初潮年齢、月経痛の有無や状況、月経時の安静状況、子宮病の有無、総合的な健康状態などを尋ねたもので、1000人を対象としたが、データを取得できたのは268人分であった。アンケートは1874年の懸賞論文の題目発表後に配送されたと推定される。データからみると、回答者の多くはいわゆる労働者階級より上の階級であったようだ。女性が月経時に安静が必要であるとすれば月経痛が問題となるためであると考えたジャコービーは、月経痛の有無でカテゴリーをわけると、主に痛みに関連した分析をしている (1877, 26-7, 32)。

この調査により、ジャコービーが明らかにした事実は、回答者の約54%は月経時に問題がないが、46%が多かれ少なかれ月経時困難を感じているというものであった (1877, 63, 225, 232)。理論的検討や観察から、月経自体は痛みを起こさないと確信したジャコービーは、月経時に困難を感じている女性の原因を探っていった。その結果、月経痛があると答えた女性たちには、そうでないグループに比べて、若い頃に適度な運動の習慣がないことを見出し、また、家族の健康も芳しくないことが多いことから遺伝的・全身体質の問題があるとした。また、社会的要因も重視し、職についていないこと、あるいは逆に適度な休憩を取らず過労となること、長く未婚でいること、またその反対に多産や適当な間を置くことなく出産することが要因となっていると分析している (Jacobi 1877, 60-2, 226-7)。そしてこれらを踏まえ、最終的に、現状では46%が困難を感じているため、雇用されて働いている場合などは人道的配慮をすべきと主張している (Jacobi 1877, 232)。ここで彼女は、月経痛は労働条件や、生育・生活環境、遺伝や運動による身体の頑強さに起因するもので女性一般に本質的にあるものではないことを明確にし、それゆえすべての女性に安静が必要なわけではないということ、および、実際に痛みを感じている人への配慮を主張したのであった。

以上のようなジャコービーのオリジナルな研究をまとめた論文は、ボイルストン医学賞を獲得することとなる。受賞は、女性にとって、フェミニズム的「勝利」といいたいところだろう。実際、『ネイション』は、医学

部へ男性と同条件で女性を入学させるかという議論が熱いなか、「弁舌」よりも重要な貢献が、女性医師によってなされたと称賛した (*The Nation*, Sep. 13, 1877)。しかしながら、彼女の主張の受容には困難がともなった。以下では彼女の主張に対する主流の男性医師の解釈から、科学言説をめぐるジェンダー・バイアスの力と彼女の論の可能性を考察する。

3. 「月経」をめぐる知の受容の困難と変革の可能性

(1) 統計利用の恣意性とジャコービーの応答

ジャコービーによる仕事のなかでも特に議論を招いたのは、アンケートのデータに関してであった。とくに、月経痛を感じている女性の「割合の多さ」には注目が集まった。例えば、女性の高等教育自体には賛成であった婦人科医でハーヴァード・メディカル・スクール教員のJ. チャドウィック (James R. Chadwick 1844-1905) は、『メディカル・ジャーナル』 (*The Medical Journal*) 誌上で、「共学と女性の高等教育」と題したシンポジウムが開かれた際、以下のように述べた。

メアリ・パトナム・ジャコービー医師が、「われわれの既存の社会状況では、46%の女性が多かれ少なかれ月経時に困難を感じている」と示したように、共学システムでは、女性は、毎月のうち数日、明らかに厳しい知的活動や持続的な知的活動を控える必要があるためにハンディキャップを負っていることは確かである。(Chadwick 1889, 670)

チャドウィックは、月経時であっても栄養が正常であれば安静の必要はないという結論には触れず、大学に通う女性は月経時に知的活動を慎むことを余儀なくされる証拠としてジャコービーの示した統計を引用したのだ。ジャコービーはすぐに公開書簡を送り、「この統計は主に限られた教育しか受けていない女性から得られたものである。よって、ここで問題となっている疑問〔共学と女性の高等教育〕に本当は適用できない」(1890, 75)として、統計データの恣意的な利用に不満を示した。確かに一見すると、ジャコービーが示したデータは、女性が月経時に健康な状態から逸脱するという見解への反論のためには不都合にもみえる。だが、いみじくもニューヨークの医師M. パーマー (Minerva Palmer) が、残り54%の女性は問題がないことを指摘したように (1890, 77)、月経痛を感じない人も多くいることは、月経痛が女性という性に本質的についてまわる問題というわけではないことを示している。まして、ジャコービーにとって理論的にも痛みの原因が月経の本質にはないことが明らかであるため、彼女は、痛みを引き起こしうる生育・生活環境面における改善を指摘したのであった。そのうえで、何らかの理由で実際に痛みを感じている人には配慮が必要であることを訴えたのであった。尚又、月経を意識しない女性よりも、月経痛がある女性のほうが積極的にアンケート調査に回答した可能性も指摘できる。

彼女の主張の受容が困難となった背景には、ひとつにはアンケート調査のデータ解釈の齟齬の問題があった。統計データは、どの観点から捉えるかで「正反対」の解釈も可能になり得る。このことは、データを解釈する場合の恣意性を如実に示している。

(2) 女性の生理的変動という説の受容

『月経中の女性の安静にかんする問題』は即座には実質的な社会的影響を与えなかったものの、彼女が発見した女性の生理的な変動の存在や、それを計測するという方法は、婦人科学会などに属する主流の医師たちに受け入れられることとなったが、こちらも困難を伴うものであった。例えば、女性には周期的な生理的変動があるという説は、アバディーン大学助産学教授W. M. スティーヴンソン (W. M. Stephenson) やシンシナティの婦人科医ジョンストン (A. M. Johnstone) など、男性研究者に受け入れられた。しかし、その生理的変動については、上述の研究者の名を冠して「スティーヴンソン変動 (“the Stephenson [*sic*] Wave”）」(Johnstone 1895) と名付けられてしまうなど、彼女の貢献は見えにくくされた。さらに、ジャコービーの実験データが、彼女の研究より後に出された、ルイヴィル医科大学産科学教授J. グッドマン (John Goodman) による類似の説を補強するものとみなされるなど (Stephenson 1882, 287, 293-4)、彼女の貢献は不当に低く評価されたきらいがある。

いっぽうでさらに問題なのは、ジャコービーの研究成果である女性の生理的変動という説や、それを計測する方法論は受け入れながら、月経時だからといって安静にする必要はないという解釈は受け入れず、むしろその変動自体を女性にとって不利なものとして扱った論者の存在であった (Bittel 2009, 133)。例えば、子宮内膜変化の発見者の一人であり、のちにアメリカ婦人科学会会長となったエンゲルマンは、「思春期、月経、出産、そして閉経は、女性の機能的人生、すなわちわが国の14-46才の32年間を特徴づける起伏」として、月経を含んだ女性の生理的変化を「危険性のあるもの」として位置付けた (Engelmann 1900, 9)。栄養状態の多寡変動があることは、女性にとって建設的な備えというよりは、女性を翻弄するようなものとして捉えられたのだった。

おわりに

これまでにみたように、ジャコービーは、男性たちに独占されてきた生理学的知識を再考し、調査した経験的事実に基づきながら、女性には「付加的栄養の多寡変動」があるため、すべての女性が月経時だからといって安静にする必要はないという、女性にとって不利とならないような、新たな月経の解釈を打ち出した。しかし、データは時に意図に反して解釈され、主流の医師たちに受容された女性の生理的変動にかんする業績に関しては、一時期、他の男性のものと同様に誤解されたり、オリジナリティを無視され、他の男性医師の説を補強するものとみなされた。女性の性に対して意味付与を行なうのは男性であるというパターンはしぶとく残り続けており、ときにジャコービーの名を排斥し、データや彼女の説を不当に評価したのである。さらには、女性の生理的変動をことさらに大きな影響をもつ危険なものと同様に強調することによって、女性が「いやおうなく制約される性別」であるという従来の認識を強化しようとした者もいた。

しかし、このように、困難はあったものの、彼女が批判的立場から果敢に議論に挑んだことは、医学や生理学の知識を確実に変容させていった。男性医師や科学者とは異なる立場から提出された「付加的栄養の多寡変動」という説が、排卵と月経との結びつきに疑義を呈し、かつ月経にかんする理解を深めたことは事実である。さらには、彼女の研究は、女性の生理的変動を計測するという方法が婦人科学の一般的な手法になることにも貢献したのである。

科学哲学者のS. ハーディング (Sandra Harding) は、価値中立とされがちな科学においても、立場性とその研究がどのようなプロジェクトのためのものであるかを認識することが重要であり、それを意識した立場から、問題解決を図るために研究することによって新しい知が生まれる可能性があると同様に主張している (2009, 24-5, 38, 105, 126-54頁)。ジャコービーが、「女性」を「月経によっていやおうなく制約される性別」として、男性たちが構築してきたと指摘したことは、科学的な知に対する立場性と偏った認識の問題を看破したことであった。ジャコービーは「女性」という性の構築のされ方に疑義をはさみ、医師としての経験知やこれまでの医学的知識を動員して月経の生理的変動を検証することにより、「月経によっていやおうなく制約される性別」という認識に変更を迫ったのである。曲解された解釈を正すために、批判に答え続けることによって、ジャコービーはその後にも月経や性別について考察を深めていくこととなる。例えば、解剖や生体の組織学的な研究を進め、子宮内膜の研究によって月経のメカニズムをさらに考察している (Jacobi 1885, 268, 384-5, 521, 523)。ジャコービーの著書は「難解」(*Medical Record*. 1878, 14) と評され、当時でも扱いにくいものと捉えられたため、一般社会に与える影響はさほど大きくなかったかもしれないが、少なくとも当時の医学界及びその後の月経に関わる認識の展開に対して、一石を投じ、波紋を広げたことは確かである。

付記

本研究は、「2010年度お茶の水女子大学大学院後期課程院生支援」の援助を受けた。

註

- 1) クラークの伝記的記録はWilson (1999) を参照した。本稿で参照した*Sex in Education*は1874年版で第5版以降のものであるが、表記がないために版の特定はできなかったことをお断りしておく。なお、クラークの議論については、拙稿、横山 (2007a) を参照。
- 2) 主に医学専門家以外の人びとによる反論にかんしては、拙稿、横山 (2007b) で論じた。
- 3) ジャコービーの伝記的記録については、Bittel (2009)、Gartner (1999)、Lurove (1971) を参考にした。
- 4) 原題は、“Do women require mental and bodily rest during menstruation; and what to extent?”であった。同題目は1874年に発表された (Bittel 2009, 126)。
- 5) ジャコービーの伝記的研究を著した歴史家C. ビittel (Carla Bittel) は、称賛を示した書評も複数あったものの、ハーヴァード大学に女性の入学を認めさせるなどの影響力をもたなかったことに言及している (2009, 133-5)。さらには、1880年代以降になっても、プリンマー・カレッジなどの教育者たちは、高等教育が健康を害するという言説に怯えていたことを窺わせる回顧録が残っている (Thomas 1908, 69)。
- 6) 19世紀の月経にかんする科学的な認識については、ラカー (1998)、Bollough and Voght (1973)、Delany et al. (1988) を参照した。また、ジャコービー (1877, Section III) による、19世紀の代表的な月経認識にかんする説明も参考にした。尚、この頃まだホルモンの存在は発見されていない。
- 7) ジャコービーのちに「生殖 (reproduction)」という言葉について、「再生産機能のために、親となる有機体の中に物質が蓄積される過程」という意味で使用したとしている (1878, 493)。

引用・参考文献

日本語文献

- ハーディング、サンドラ 森永康子訳 2009『科学と社会的不平等—フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判—』北大路書房 (Harding, Sandra. 2006. *Science and Social Inequality: Feminist and Postcolonial Issues*. University of Illinois Press)。
- 村松正隆 2005 「生命特性と哲学—ビジャの生理学とその影響—」『フランス哲学・思想研究』第10号、1-14頁。
- 横山美和 2007a 「19世紀後半アメリカにおける『女性』の構築と科学言説—E. クラークの女子高等教育論を中心に—」『F-GENSジャーナル』第7号、273-9頁。
- . 2007b 「19世紀後半アメリカにおける『科学的』女子高等教育論争の展開」『F-GENSジャーナル』第9号、145-52頁。
- ラカー、トマス 高井宏子・細谷等訳 1998『セックスの発明—性差の観念史と解剖学のアポリアー—』工作舎 (Laquer, Thomas Walter. 1990. *Making Sex: Body and Gender from the Greek to Freud*. Cambridge, Massachusetts, and London, England: Harvard University Press)。

外国語文献

- Bittel, Carla. 2009. *Mary Putnam Jacobi and the Politics of Medicine in Nineteenth-Century America*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Bullough, Vern, and Martha Voght. 1973. Women, Menstruation, and Nineteenth-Century Medicine. *Bulletin of the History of Medicine* 47 (1): 66-82.
- Chadwick, James R. 1889. Coeducation and The Higher Education of Women: A Symposium. *Medical News* 55 (Dec. 14): 669-70. 'Internet Archive,' <http://www.archive.org/details/medicalnews55philuoft> (accessed July 26, 2010).
- Clarke, Edward H[ammond]. 1874. *Sex in Education; or, A Fair Chance for Girls*. Boston: James R. Osgood.
- Delaney, Janice, Mary Jane Lupton, and Emily Toth. 1988. *The Curse: A Cultural History of Menstruation*. Rev. ed. University of Illinois Press.
- Engelmann, George J. 1900. President's Address: The American Girl of To-day (Reprinted from *Transaction of the American Gynecological Society*, 1990). Philadelphia: American Gynecological Society, 'Women Working,' <http://ocp.hul.harvard.edu/ww/> (accessed Jun. 24, 2010).
- Gartner, Carol B. 1999. JACOBI, Mary Corrina Putnam. In *American National Biography*, ed. John A. Garatty and Mark C. Carnes, Vol. 11: 784-6. Oxford University Press.
- Jacobi, Mary Putnam. 1877. *The Question of Rest for Women during Menstruation*. New York: G.P. Putnam's Sons.
- . 1878. Letter to the editor, 'The Question of Rest for Woman.' *Popular Science Monthly* 12 (25): 492-4.

- . 1885. Studies in Endometritis. *American Journal of Obstetrics and Diseases of Women and Children* 18:262-83, 376-86, 596-606, 'Google Books,' <http://books.google.com> (accessed Dec. 3, 2010).
- . 1890. Letter to the editor, 'The Higher Education of Women.' *Medical News* 56 (Jan. 18): 75-7, 'Internet Archive,' <http://www.archive.org/details/medicalnewsvolu08unkngoog> (accessed Jul. 26, 2010).
- Johnstone, A. W. 1895. The Pathological Aspects of Stevenson's Wave. *American Journal of Obstetrics and Diseases of Women and Children* 31 (5): 662-8, 'Internet Archive,' <http://www.archive.org/details/americanjournalo31ameruoft> (accessed Jan. 6, 2011).
- Lubove, Roy. 1971. JACOBI, Mary Corrina Putnam. In *Notable American Women, 1607-1950: A Biographical Dictionary*, ed. Edward T. James et al., Vol. 2: 263-5. Cambridge, Mass. : Belknap Press of Harvard University Press.
- Maugh's, G. M. B. 1867. Menstruation, or the Menstrual Flow: An Epiphenomenon of Ovulation. *Galveston Medical Journal* 2 (8): 812-36, 'Google Book,' <http://books.google.com/> (accessed Apr. 4, 2009).
- Medical Record*. 1878. Reviews and Literary Notice. Vol. 13 (1): 14. 'Internet Archive,' <http://www.archive.org/details/medicalrecord10stedgoog> (accessed Aug. 5, 2010).
- Michelet, M. J. 1860. *Love ("L'amour.") : From the French of Jules Michelet*. Translated by J. W. Palmer. New York: Rudd & Carleton. 'Google Book,' <http://books.google.co.jp> (accessed Nov. 13, 2009).
- Palmer, Minerva. 1890. Letter to the editor. 'Co-education and the Higher Education of Women.' *Medical News* 56 (Jan. 18): 77-8.
- Stephenson, W. M. 1882. On the Menstrual Wave. *American Journal of Obstetrics and Diseases of Women and Children* 15:287-94.
- Thomas, M. Carey. 1908. Women's College and University Education (Reprinted from *Educational Review*, 1908). 'Women Working,' <http://ocp.hul.harvard.edu/ww/> (accessed Nov. 2, 2009).
- Walsh, Mary Roth. 1977. *Doctors Wanted, No Woman Need Apply: Sexual Barriers in the Medical Profession, 1835-1975*. Yale University Press.
- Willson, Philip K. 1999. CLARKE, Edward Hammond. In *American National Biography*, ed. John A Garraty and Mark C. Carnes, Vol.2: 961-2. Oxford University Press.